

大人が絵本を 第63回 読書離れとは、



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*
小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー BibliOキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

学校読書調査2019発表

全国津々浦々の小学校、中学校、高等学校には必ず、図書室ないしは図書館があります。その学校図書館の充実発展と青少年読書の振興を図るため活動を行っているのは、「全国学校図書館協議会」という公益社団法人で、英語名称「Japan School Library Association」の略称「全国SLA」と呼ばれています。

全国SLAは毎日新聞社と共同で、1954年より毎年、全国の小・中・高校の児童生徒を対象に読書状況調査を実施しています。その結果は、秋の読書週間に合わせて毎日新聞紙上で発表され、のちに単行本となって誰でも読むことができます。

『2019年版
読書世論調査』
(毎日新聞社)



昨年の10月下旬に発表された2019年の学校読書調査では、中学生の1か月平均読書冊数が4.7冊(前年比+0.4冊)と、調査開始以来の最高水準を記録しました。小学生が11.3冊(前年比+1.5冊)、高校生が

1.4冊(同+0.1)で、前年の減少を回復させたのです。また、1か月間に読んだ本が0冊である「不読率」の割合は、小学生が7%、中学生が13%、高校生が55.8%となり、いずれも前年からほぼ横ばいながらもごく僅かな減少がみられています¹⁾。

「読書離れ」って、ほんとう？

「読書離れ」が叫ばれて久しくありますが、本当のところはどうなのでしょう。下図は、平成時代に実施された読書調査より、1か月平均の読書冊数を図にしたものです。小・中学生における読書量の増加と、高校生の「読書離れ」の実態が浮かび上がっています。

小学生は1980～1990年代の1か月平均が6.5冊の水準で、90年代の不読率平均は11.9%と、ほどほどの読書活動がなされていたことが分かります。その状況がますます良好に改善されたことを、グラフは表しているのです。90年代終わりの1999年に1か月平均が7.6冊に達すると、2000年代半ばから急上昇し、2008年には平均11.4冊と、調査開始以後はじめて10冊超えを達成したのです。そして2010年代は、1か月平均10.6冊の結果を残しました。不読率

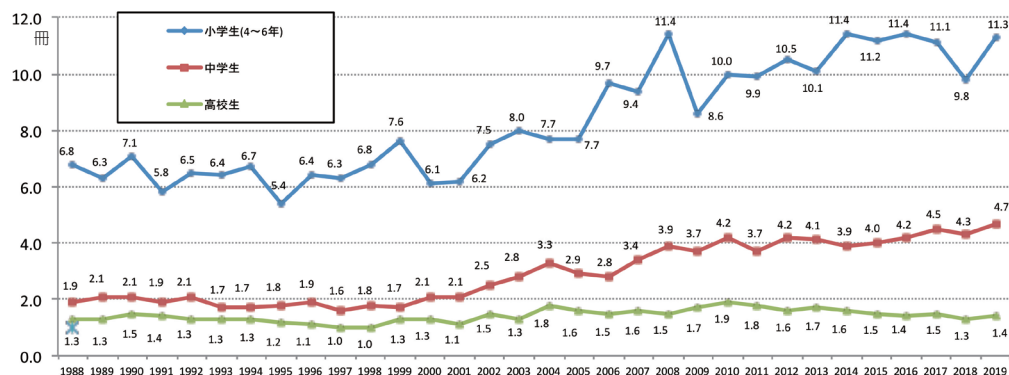


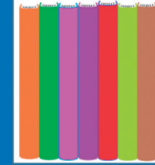
図 平成時代の1か月平均読書冊数の推移 (毎日新聞社『学校読書調査』より作成)

手にするときは！ これいかに？



企画 濱野 良彦
構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)



は2010年以降、5～7%まで下がったのです。

80～90年代の中・高校生は低空飛行が顕著で、1か月平均読書は1～2冊です。不読率は、90年代の中学生平均48.9%、高校生に至っては62.5%と、中学生から早々に「読書離れ」が始まっていたのです。ところが、2000年に入ると中学生の読書量が上昇をみせ、高校生との間に差が表れはじめるのです。2000年に1か月平均が2冊台に載って以後、2冊を割ることなく上昇するばかりで、2008年には3.9冊に達し、2000年代の平均を2.9冊として若干の改善をみせました。中学生の読書の気流はここに留まらず、2010年に4.2冊の最高値が報告されてからも、さらに伸び2019年の値まで上って、読書量の改善が示されました。

高校生に目を移すと、1980年代から2010年代まで、1冊台を抜けることはありませんでした²⁾。高校生については「読書離れ」を指摘するよりも、「読書推進活動」の取り組みが賢明ではないでしょうか。



「読書離れ」という言葉の登場



「読書離れ」と言われ始めたのは1970年代後半のことで、80年代後半になると新聞記事で急激に登場するようになったとの報告があります³⁾。しかし、学校読書調査を遡ってみると、1964年、既に小中高校生の不読率が急上昇したことが記録されているのです⁴⁾。1964年とは、前回の東京オリンピックが開催された年で、オリンピックを契機として一般家庭にテレビが普及を始めたときです。その歴史は、我が国が高度成長を遂げるスタートでしたが、同時に文明の利器はこのときから、人間がもつ原始的な思考の能動的活動に影響を及ぼし始めていたのです。

こんなにも長きにわたり、子どもの「読書離れ」が

指摘されているにもかかわらず解決していないのは、介入・支援ができていない大人の責任です。児童期・思春期・青年期の発達過程にいる未熟な子どもたちの問題点を支援し、良い方向に導くのは大人の役目です。



読書活動の改善に向けて、行政が動いた！

実のところ平成時代は、子どもの読書環境を改善しようと行政が活発に議論と策定を重ねているのです。2000年の「子ども読書年」を皮切りに、2010年の「国民読書年」までの約10年間、国と各自治体がタッグを組んで様々な施策と事業が相次ぎました。

それが2000年以降の小・中学生の読書率上昇に繋がったのです。一方、施策に問題があったことも確かで、高校生の読書習慣を形成することはできませんでした。また、続々と進化する電子メディアの出現に何らかの手立てを打たなかったことも反省すべき点です。

成果となったのは、行政の事業だけではありません。一高校教員が取り組みを始めた「朝の読書運動」は小・中学生を読書の習慣化へと誘い、読書率の上昇を牽引したのです。1996年に千葉県の高校で導入された実践例が発表されると全国に広まり、行政も推進活動に参加したことで、2000年末には全国5000校が実施、2002年には1万校に達し、現在では小・中学校の8割、高校の5割が「朝読」を導入しているのです⁵⁾。「朝読」実施校率と、小・中学生の平均読書数の相関関係に「読書離れ」の改善をみることができます。

「朝読」は、知識の向上や興味関心の高揚だけでなく、心を落ち着かせて学習活動を安定させる効果も明かされ、児童生徒の発達に好影響を及ぼす報告もあります⁶⁾。一概には言うことのできない本の力です。



絵本の日



幸せの種を开花させたブックスタート

行政の読書事業で一定の成功をみせているのは、ブックスタートです。子ども読書年の2000年に日本国内に紹介され、翌年には12市町村が導入をはじめてから全国に拡散された種は、少しずつ少しずつ芽を出し、いま実りをみせています。各自治体による格差があったり、実施方法に問題があったりして、まだまだ課題はありますが、20年をかけて「赤ちゃん絵本」に社会的な評価が得られたのです。

ブックスタート事業がある程度の定着を図ることができたのは、支援対象が大人であることに起因すると考えます。「赤ちゃんに絵本」といっても、活動の主体は保護者であり、保護者の能動的な活動を赤ちゃんが受けることによって始めて読書活動が成立するのです。その場に豊かなコミュニケーションが生まれ、親子の笑顔が増えて、幸せを実感した大人たちは、絵本を遊びの中心に取り入れるようになります。

乳幼児期については、ブックスタートを真のスタートにした“乳幼児サービス”の展開が必要です。そのサービスに着手しているのがビブリオキッズ&ベビーでして、本連載で実践例を報告してきたとおりです。

大人に知ってほしい！読書の発達段階

ブックスタート事業の定着をみたとき、「読書離れ」の顕著な高校生への支援方法に、課題がみえてきます。そして、それは小・中学生の児童期、思春期という発達段階にいる子どもたちにも同じことが言えるのです。

人に発達段階があるように、読書にも発達の過程があることは度々、触れてきました。読書の発達段階には、「読書能力」と「読書興味」があります。「読書能力」とは読んで字のごとく、読書をする能力、すなわち心身の諸能力・機能の発達そのものに大きな影響を与える要素です。この読書能力の発達に影響を与える内的要因のひとつが「読書興味」でして、個

人がどのような内容の本を好んで読むかという、読書材の選択を規定する傾向性のことを言います⁷⁾。

「読書能力の発達段階」では、一般的な傾向として、多読期後期の11～12歳、つまり小学校6年生で「自分のニーズに合った読書材を適切に選択することができるようになり、内容を評価したり鑑賞したりすることができるのですが、この段階で発達がとまる者、以後偏った面だけが発達するものが出てくるおそれがある」とされています⁸⁾。80～90年代そのものです。

なんととっても、保護者の支援がキー！

高校生の不読率の一因に、身の回りの生活環境の変化、中でも電子メディア環境があることは事実ですが、そこに至るまでの発達過程にあることもまた事実でして、保護者による乳幼児期からの継続的な支援が重要ポイントになるのです。保護者の中には、「字が読めるのだから自分で読みなさい」「小学生なんだから一人で読んで」と発言される方もおられますが、絵本は大人と子どもを介してこそ、両者ともに発達していくツールなのです。高学年にもなると読みあいだけでなく、読書の会話までなくなる家庭もありますが、このやり取りとは、読書体験の共有というだけでなく、感想から生まれる会話、すなわち発達に大切な親子のコミュニケーションの機会を奪われていることになるのです。

読み手と聞き手の間にコミュニケーションのある読みあいには、情緒の発達やことばの発達、読書のレディネス形成に効果があると言われていています。読書のレディネスとは、読書を楽しむことが可能な心理的準備状態が整っていることを指し、具体的には、一つひとつの言葉や場面をイメージ化したり、場面をつないで一つのストーリーの流れを楽しんだりできることを意味しています⁸⁾。

私は、小学校と高等学校司書勤務の経験上、この「学校読書調査」による数値を生身で受け止め、高校での読書教育に戦略をもって対峙してきた経緯があり

ます。特進クラスで国公立大学を目指す学力の高い生徒に、読書のレディネスが形成されていないケースにも応じてきました。読む能力を発達させるには、聞く能力を発達させる必要があります、これらは子どものその後の発達段階に重要になるのです。だから、大人と子どもの読みあいが大切ということなのです。

趣味では終わらせられない子ども時代の読書

読書の教育心理を専門とする秋田喜代美氏は、「子どもの読書環境は、物理的環境よりも本と子どもの出会いに関わる親や教師、友だちという人的環境と、その人的環境と子どもと本の間で生まれる出来事が問題の中心となる」と述べています⁹⁾。乳幼児期に家庭で絵本の読みあいを積極的に取り入れていても、小学校に上がった途端、学校任せになりがちですが、小学校の6年間における学校と家庭それぞれにおける読書教育こそがその後の発達に影響を与える要であって、青年期に続く読書の発達課題を達成していけるのです。

しかしながら、一般の大人はそういう情報を持ち合わせていません。読書教育の専門家である司書教諭や学校司書が保護者に発信していかなければ、家庭での読書の発達に格差が生じる原因となっていることは否めません。ブックスタート事業を大人に発信し、功を奏したように、物事を理解できる年齢にいる子どもであっても、親子両者への支援が必要ということを大きな声で発信したいものです。

年齢が上がるにつれ、「読書離れ」の傾向にあることは、もう長いこと言われ続けてきました。読書とは、大人にしてみれば至極、個人的な趣味であって、強要されるものではないと言われるでしょう。2001年に制定された、「子どもの読書活動の推進に関する法律」では読書の意義を「子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく」活動とされています¹⁰⁾。つまり、読書が多様な能力を総動員で

きる活動であるから、子どもたちの「生きる力」を養うためのツールとして活用しようというわけです。

全年齢に子育て支援を!!

昨年の第65回学校読書調査では、期せずして「子どもの読書と大人との関係」が一つの柱とされ、「家の人と読んだ本についてよく話をする子どもほど、本をよく読む傾向が浮かんた」と報告されました¹⁾。この結果を受けて秋田喜代美氏は、「家の人と本の話をするのが、子どもの読書意欲につながることを示唆する結果」とコメントしています¹⁾。

行き着くところ読書とは、楽しみの娯楽にあって、興味関心の促進や知識の拡大に留まらず、保護者と言葉を介して豊かなコミュニケーションを図り、自分の考えを深めて人間性を豊かにする活動なのです。

ビブリオキッズでは、衣食住と同じに絵本のある日常を日々、勤めています。年齢があがるにつれ、読書活動に意識的なコミュニケーションを重視することで、子どもたちの「生きる力」が培われるというわけです。乳幼児期の保護者だけでなく、児童期・青年期の保護者にも等しく子育て支援を行っていきましょう。



文献

- 1) 全国学校図書館協議会：第65回学校読書調査，毎日新聞社，2019. 10. 27, pp.12-13.
- 2) 毎日新聞社：読書世論調査（第25回～第64回学校読書調査），毎日新聞社，東京，1980～2019.
- 3) 清水一彦：「若者の読書離れ」という「常識」の構成と受容，出版研究(45)，pp.117-138, 2014.
- 4) 比佐 篤：「学校読書調査」から見る戦後の小中高生の読書傾向，関西大学図書館フォーラム(20)，pp.3-15, 2015.
- 5) 朝の読書推進協議会：広げよう「朝の読書」，朝の読書推進協議会HP <https://www.mediapal.co.jp>
- 6) 朝の読書推進協議会：「朝の読書」はもうひとつの学校，メディアパル，東京，p.109, 2005.
- 7) 坂本一郎：現代の読書心理学，金子書房，東京，pp.117-144, 1976.
- 8) 植松貞夫，鈴木佳苗：児童サービス論（現代図書館情報学シリーズ6），樹村房，pp.4-11, 2012.
- 9) 秋田喜代美：読書の発達心理学－子どもの発達と読書環境，国土社，pp.11-17, 1998.
- 10) 文部科学省：子どもの読書活動推進ホームページ，文部科学省HP <http://www.mext.go.jp>（登録：平成21年以前）